

正、敬礼の励行等で束縛される。

集結地のナホトカではグループの活動めざましく、大勢で携っていた。熟弁に圧倒される。壁新聞等も大々的誇大揭示で、徹底的共産主義の思想普及樹立に大わらわであった。乗船の日まで使役に動員される。九月十四日、待望の引揚船第一大拓丸乗船、午後四時出帆、誘導艇の先導で出航。一路函館港を目指す。

## 飢餓地獄

岩手県 石橋 喜治郎

抑留といえば、十人中十人が口をそろえて、飢えと労働の苦しさ、そして寒さを語ると思います。四十余年を経た今、振り返っても、一番先によみがえるのが、飢えと寒さと労働の思いしか残らない。

抑留生活では、腹が満たされた日が数えるくらいしかなく、空腹を抱えさまよい歩く野良犬姿だった。現実離れして想像することができない地獄の底を、大勢

の男たちがひしめき、その行動はまさに餓鬼道の様相を呈し、食を求めぬあくなき執着心は、鬼気迫るものがあった。

収容所の一日は、まず貧しい朝食から始まる。用便を終えると、即食事の態勢に入り、歯磨きや洗面等、朝の忙しい身支度も必要がない。食事当番の運ぶ朝食を待つだけである。

一張羅のあかじみた服を着て寝るので、起きて着替えずしなくても作業衣となり、至極便利である。炊事用水、飲料水以外に水の蓄えがないから、顔や手足を洗えるのは入浴のときだけでした。普通の生活感覚の朝を迎えることなど及びもつかないし、不衛生な状態も何ら意に介せず、平気なものである。当番が炊事所に行き、配給される黒パンのかたまりと、煮込み雑炊を運んでくる。毎日変わることがないメニューです。雑穀類と、野菜・魚・肉等配給の品々一切を炊き込み、増量した煮込み雑炊が運ばれる。朝より夕食が若干固いのが通例でした。朝の雑炊は、やわらかくて持ち歩きできないので朝食となり、パンが昼の携行食です。

この食事配分のときこそ、異様な雰囲気漂う無気味なときであつて、大人が稚児に還る一瞬であつた。

分配係は器用で誠実な者があらかじめ指名されている。この特定された者だけが、手を触れることができる。この係の必需品といえ、天びん秤（ばかり）、包丁、しゃもじが絶対欠かせない。もちろん現地で調達した手製の品々で、包丁（小刀）は刃物であるから、器具検査で見つけられないように慎重に保管しておく。雑炊を各人さまざまな器に、濃度、中味を加味して等量に配り、なおかつ秤にかけて、重さを計つて正確を期すことになる。パンも輪切りして、調整しながら一片も残さずに重量を計り、さらに公平にと、くじ引きで分配される。皆一斉に凝視する秤で分配するので並み大抵の神経ではできない役柄であつたらう。分配者の手もとを監視しながら、諸動作の一挙手一投足に至るまで見逃すまいと目を皿のようにしていた各人のまなざしを今思うと、人間の仮面をかぶつた野性獣たちの、食うか食われるかの生存競争に似ていたように思ひます。

浅ましい限りだつたと恥じ入りますが、あのころ生きるために死力を尽くし、理性を失い、個々の人間生活しか、存在しない社会でした。

このように時間をかけて、公平無比におのおの渡つた食事も飢餓死亡者たちの胃袋を満たすには不十分で、片腹にしかおさまりませんでした。薄い煮込み雑炊の朝食はもちろんのこと、少々固めの夕食も、箸（はし）が使えず、手づくりスプーンで口に運ぶのですが、ちよつと幼子がおいしいものを惜しみながら食べるときと同じ動作をするのです。そしゃくしなくてもよい雑炊を、一口ずつなめ回して、感触を味わうかのようにゆつくり時間をかけて胃袋に飲み込んでやる。この食事どきが、餓鬼道から逃れ、唯一人間性に戻るときだつたと思ひます。

朝食だけでは腹の虫が治まってくれないので困りました。携行食の黒パンも一緒に食べると、どうやらやや満腹感を味わえたが、習性になると困るので、欲望を押さえるのに大変苦労した。食意地とおのれの命とを天秤に掛けたのである。食糧の確保が可能な農場と

か、糧秣庫に行く際にしか実行しないよう極力努めた。

夏季作業の際に野生のアカザが群生している場所が見つかって、二食分を朝、腹に詰め込んで手ぶらで出掛けることもありました。昼どきアカザを煮上げ、だんご状に丸めて昼食代用に食べたが、塩の手持ちがないので、煮地で飲み込んだものでした。その他、蛇、カエル、ネズミ、カタツムリ等、手当たり次第食糧にかえることに寸暇を惜しんで搜し回り、栄養補給のため一生懸命であった。

特に松の倒木や、切れ株に巢食う鉄砲虫は最高の栄養源と思い、焼いて食べました。おいしくて食べると急に体力が強まった気分となりました。野草類や木の芽も随分食べた経験もありますし、秋になると名前も知らないキノコも恐れることなく、腹を満たすだけの食糧として採取に励みました。採って煮ても、味付する塩がなかった。それでも満腹感を味わいたくて、盛んに口に入れたのである。

人が生存するために塩と水が大切な要件であることを痛切に感じました。

振り返ると、食欲の化身となって命の糧をあさり、醜い餓鬼道に落ち込んだ時期が、抑留の三年目までだった。四年目ごろから中間搾取が少なくなったのか、増量の気配が感じられたのと、あるいは各人の胃袋が順応できたのか、あきらめも一緒に手伝って、食に対する執着が幾らかでも緩和され、生活に多少の潤いがあったように思えた。

抑留の当初から、箸を使って食べることを夢見て、余暇を盗んでつくったエンジュの木の箸を後生大事に持ち歩いていたが、日本人好みのご飯にはめぐり会うこともなく、未使用のまま悲願の箸は、ナホトカで捨てました。

食物にまつわる話には、シベリヤの足かけ五年の生活中、悲しい思いだけです。食物の恨みは恐ろしく、決して忘れることはない。まずいものでも人並みに食べさせてほしかった。農業国ソ連も、戦争で生産力が低下し、自国民への配給さえ意のごとくにならないのに、余分な捕虜たちの分まで面倒を見る余裕などなかったということなのか。

彼ら自身、お粗末な食糧事情のもとでの生活は認める。入ソ時同行した兵士たちも、黒パンとマンドリン（自動小銃）の弾薬を背負って、腰に水筒だけの軽装で行動する。食事は、黒パンをかじって水を飲んで終わりである。簡単で早いこと、驚きの一語に尽きた。

その後の抑留生活で垣間見たソ連人の食事風景も、捕虜たちと大同小異、あまり変わりがなかった。

私の場合、抑留生活での三種の神器に等しい宝物は、一枚の毛布・手製の木造スプーン（先の平たいものと二種類）、それに紙だ。寝る、食う、楽しむ、の生活原則最低限の道具だった。特に紙は、かけがえのない品物で、排泄した尻拭いには、もったいなくて絶対に使わなかった。主用途はまれに配給されたたばこの貴重な巻き紙として大切に所持していたものである。

## 厳寒の地で友との別れ

新潟県 高橋 勝 男

昭和二十年十月九日、我々を一週間乗せた有蓋車が停まった。全員降りろとの声に外へ出たら、水たまりが一面氷が張ってあった。故郷では秋の節句で、クリの入った赤飯を食べてのお祭りである。ソ連での抑留生活が、この日から始まった。

二キロも歩いたところに八尺くらいの分厚い板塀が張りめぐらされ、その前後三メートルくらいに有刺鉄線が張られ、四隅には高いやぐらが立ち、歩哨が立っている。三尺くらいに切断した鉄道線路がぶら下げられてあり、五分くらいに打ち鳴らして、四隅互いに連絡をとり、居眠り防止と逃亡者を見張っているのだ。何の因果でこのようなところへ来たのかわからない。四、五日過ぎてから、労働が始まった。十一月ころになつたら全く寒くなり、着るものもほとんど夏服なの